

企画展

ほとけを支える

Supporting the Buddhist Image

根津美術館
NEZUMUSEUM



2017年

9月14日(木)～10月22日(日)

【休館日】 毎週月曜日、ただし、9/18(月・祝)、10/9(月・祝)は開館し、9/19(火)、10/10(火)は休館

蓮華 · 靈獸 · 天部 · 邪鬼

Demon

Deva

Sacred Beast

Lotus Flower

この展覧会は、仏教の多種多様なほとけの図様を、支えるもの“という視点から見るとです。ほとけが何によつて支えられ、何に乗り、あるいは何を踏みつけているのかを知ることが、それぞれのほとけの名前や意味を知るヒントでもあります。

ほとけの台座といえは、まず蓮の花、すなわち“蓮華”をあげるべきでしょう。泥の中より茎を伸ばし、水面に触れることなく白や淡紅色の優美な花を咲かせる蓮は、仏教を象徴する花として愛されています。

ほとけを乗せる動物には、普賢菩薩を乗せる白象、また文殊菩薩を負う獅子が有名です。また、天部のほとけでは、甲冑に身を包む武神(四天王)が邪鬼を踏み、優美な女神(弁財天)は蓮の葉を台座にしています。また、阿弥陀如来や地藏菩薩の出現は、ほとけを乗せた雲の動きによつて表わされます。

そして密教では、ヒンドゥー教の神々を取り込むことで、ほとけとそれを支える台座の種類を飛躍的に増やします。多様なほとけの相関図である曼荼羅は、台座の種類を見ることで、ほとけのグループやその構成がわかります。

この展覧会では、「金剛界八十一尊曼荼羅」「善光寺縁起絵」「愛染明王像(いずれも重要文化財)」といった絵画の名品、「毘沙門天立像」「不動明王立像」の彫像など、根津美術館コレクションより選りすぐった日本の仏画約40件を展示いたします。仏教美術のシンボリズム、その豊かな世界をお楽しみください。

ほとけを支える
— 蓮華・靈獸・天部・邪鬼 —



靈獸

もんじゅぼさつぞう
文殊菩薩像 1幅 絹本着色
日本・鎌倉時代 14世紀
根津美術館蔵

宝剣と経巻を手にもち獅子に乗るのは、ほとけの智慧を象徴する文殊菩薩の図像。釈迦如来を中心に、向かって右に獅子に乗った文殊菩薩、左に白象に乗った普賢菩薩を表わす三尊形式がよくみられる。



蓮華

しやくかさんぞんぞう
釈迦三尊像(部分) 1幅 絹本着色
日本・南北朝時代 14世紀
根津美術館蔵

濁った泥の中より茎を伸ばし、水面に触れることなく白や淡紅色の優美な花を咲かせる蓮華は、仏教を象徴する花として愛されている。ほとけを表わす絵画や彫刻の多くで、ほとけたちは、この花の中心で上面を平らなかたちにした花拓(花床ともいう)にすわり、あるいは立っている。この蓮台はそれだけで蓮華座になるが、それを動物や雲に乗せると靈獣座や雲座とよばれる。

邪鬼



びしやもんてんりゅうぞう
毘沙門天立像
1軀 木造彩色
日本・鎌倉時代 14世紀
根津美術館蔵

仏教世界の守護神、四天王は、邪悪や邪教の象徴である鬼を踏みつけて立つ。北方を守る多聞天は、本像のように毘沙門天とよばれ、特に信仰された。降伏する鬼の姿はどこかユーモラスである。

天部



重要美術品
つうざんぞんぞう
降三世明王像(五大尊より) 1幅 絹本着色
日本・鎌倉時代 13世紀
根津美術館蔵

密教が生んだ五大明王のうちの一尊・降三世明王は、俗世の主を降伏する忿怒尊。その威力は、左足が大自在天の顔を踏み、振り上げた右足をその妻烏摩妃の手の平が支える図様で表される。



(部分)

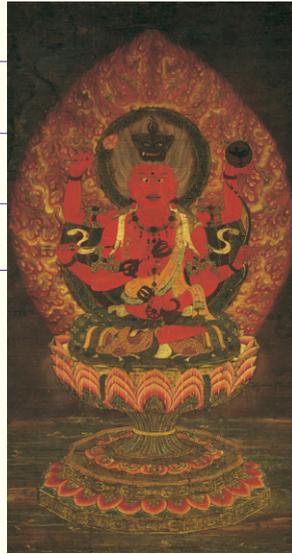
雲



あみだにじゅうごぼさつらいごうず
阿弥陀二十五菩薩来迎図(部分)
1幅 絹本着色
日本・鎌倉時代 14世紀
根津美術館蔵

雲に乗ることで、ほとけの出現や移動が表される。阿弥陀如来が死者のもとに向かう来迎図はその典型。雲上で菩薩たちは楽器を奏で、舞い踊る。雲の航跡が飛行の向きやスピード感を表す。

彫像の 台座



重要文化財
あいぜんみょうおうぞう
愛染明王像 1幅 絹本着色
日本・鎌倉時代 13世紀
根津美術館蔵

密教尊の愛染明王は、宝瓶上の日輪中に赤身忿怒の姿を表すのだが、本図の明王は壮麗な框座に坐す。白河天皇御願の寺・法勝寺に安置されていた彫像を写した画像として貴重。

同時開催

水や酒を蓄え、注ぎ、そして飲むためには瓶や注器が必要でした。そのための器は、先史時代にはすでに作られていました。その様相と展開をみてゆきます。

展示室5
水瓶

ごさいくじゃくもんせんきんびん
五彩孔雀文仙蓋瓶
景德鎮民窯 1口 金欄手
中国・明時代 16世紀
根津美術館蔵



金属器の瓶を写した器形は16世紀ころには盛んに作られ、金欄手の瓶は主に、日本へむけて輸出されました。華やかな金彩の器で注がれた酒は、美酒であったことでしょう。

せいどうすいびょう
青銅水瓶
1口
日本・鎌倉～室町時代 14-15世紀
根津美術館蔵



しぎがた
信貴形と称される水瓶。名称は、奈良県の信貴山にある寺に伝わる水瓶に由来し、仏前に浄水を供える器として使われたものです。

九月の異名である菊月は、秋草が風にそよぎ、月が美しく輝く季節です。秋の景色を楽しむ茶道具約20件を取り合わせます。

展示室6
菊月の茶会

いものこちやいれ ありあけ
芋子茶入 銘有明
瀬戸 1口 施釉陶器
日本・室町～桃山時代 16世紀
根津美術館蔵



「芋子」とは肩が丸く、首が短い姿の瀬戸茶入のこと。銘は夜明けの月を詠んだ和歌「又たくひあらしの山の麓寺杉の庵に有明の月」に因む。

いちじゅうぎりはなれ みいでら
一重切花入 銘三井寺
千宗旦作 1口 竹
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵



千利休作の「一重切竹花入 銘 園城寺」(東京国立博物館蔵)を、孫の宗旦が写したもの。園城寺の通称「三井寺」が銘としてつけられている。

関連プログラム

講演会	「ほとけを支える動物たち」 日時 9月30日(土) 午後2時～3時30分 講師 白原 由起子 (根津美術館 特別学芸員) 会場 根津美術館 講堂 定員 130名
〈申し込み方法〉	当館ホームページの「イベント情報」の申込みフォームから、または往復はがき(1参加者につき1枚)に参加を希望される講演会名・住所・氏名(返信面にも)・電話番号を明記の上、〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1 根津美術館講演会係宛にお送りください。 ※先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。
スライド レクチャー	日時 9月15日(金)、10月7日(土)、10月20日(金) いずれも午後1時30分より約45分間 会場 根津美術館 講堂 定員 いずれも130名
	担当学芸員より全体の見どころを、それぞれのテーマで解説いたします。 開始の15分前より開場します。 ※先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。

開催概要

展覧会名	企画展「ほとけを支える 一蓮華・霊獣・天部・邪鬼一」
主催	根津美術館
開催期間	2017年9月14日(木)～10月22日(日)
開館時間	午前10時～午後5時 [入館は午後4時30分まで]
休館日	毎週月曜日、ただし9/18(月・祝)、10/9(月・祝)は開館し、翌9/19(火)、10/10(火)は休館。
入館料	一般1100円(900円) 学生800円(600円) ()内は20名以上の団体料金、中学生以下無料
前売券	一般900円 学生600円 ※2017年7月13日(木)～9月3日(日)「やきもの勉強会」展開催期間中、根津美術館ミュージアムショップにて販売
アクセス	地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道)駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分
住所	〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
お問合せ	TEL 03-3400-2536 (代表) http://www.nezu-muse.or.jp

次回展



牡丹蝶図鐔 加納夏雄作 日本・江戸～明治時代 19世紀 根津美術館蔵

特別展

たがね

鑿の華

—光村コレクションの刀装具—

2017年 11月3日(金・祝)～12月17日(日)

明治期に刀剣と刀装の技術に魅せられた実業家・光村龍獅堂。その足跡と稀代のコレクションを公開します。